

(様式2)

令和6年度 自己評価及び学校関係者評価書

令和7年3月18日
札幌市立宮の森小学校

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
【1】人間尊重の教育		B	◇多様性を認めるインクルーシブ教育への理解を高め、交流及び共同学習を推進する。 ◇行事を通して相手意識を高める取組の継続 行事の目的を明確にし、行事を通して互いを尊重しあう意識を醸成していく。 「運動会」「学習発表会」「卒業式」等の取組を意図的に「見る」「見せる」関わり ◇取組が効果的に保護者に伝わる工夫 学校HPの充実、学校保護者間連絡システム「すぐる」の更なる活用 ◇呼称に「さん」を付けた取組の継続。	A	A
・「学習活動づくり」「人間関係づくり」「環境づくり」を相互に関連させて取り組んでいく。 ・子ども一人一人が「自分が大切にされている」と実感できる宮小へ。 ・自他ともに価値ある存在として尊重する相互承認態度を高める子どもへ。 ・教職員自らの人間尊重の意識向上を。 ・子ども自身が自分を振り返り、人間尊重の意識の高まりに気づく手立てを。 ・互いの個性や多様性を認め合い、個別の人権課題への取組の推進。					
学校関係者評価委員会による意見		○6年生と1年生の関わりが微笑ましく、「人間関係づくり」の面でお互いの成長になっている。 ○教室での机の形態が色々あって、先生方の「環境づくり」への配慮が見られる。 ○姉妹校受入れによる交流が外国児童への理解を深めた。 ○連絡システムによるタイムリーな情報発信が図られた。 ○子どもたち一人一人が互いの個性を知り、得手不得手も認め合うことが大切だと思う。 ○運動会や学習発表会、卒業式などの行事は、可能な限り、全学年が参加できるよう工夫してほしい。			
【2】学ぶ力の育成		A	◇来年度からの授業研究の在り方検討 今年度は教育実践発表会を開催し、我々の取組を広く問い、参会者からたくさんの意見をいただくことができた。今後の授業研究の在り方について、授業改善部と協力し令和7年度の取組（研究教科や授業公開等）の概要について検討する。 ◇小中パートナー校学習会を円山小、向陵中、本校の3校で実施し、小中の学習のつながり、教師のつながり、児童生徒の支援のつながり等を会同のもと、共通理解を図ることができた。来年度も継続する。 ◇学びのサポーターの活用	A	A
・分かる・できる・楽しい授業づくりの充実を図る。 ・子ども自ら考え、判断し、表現する学習活動の充実を図る。 ・自分への自信につなげるきめ細かな指導の充実を図る。 ・知識の理解の質を高め、資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、言語活動や体験的な活動を充実させ一人一人の学ぶ意欲の向上につなげる。					
学校関係者評価委員会による意見		○「円周率は3と4の間にありそうだね。」と子どもに投げかけながら授業を進めたり、具体物を使って体感的な理解を深めたりしている先生方の授業がとてもよかった。 ○外国語や音楽での専科指導、ICTを活用した学習等、授業内容のレベルが高い印象を受けた。今後も続けてほしい。 ○子ども自ら考える授業を進めている。 ○児童アンケート結果からも、育成が成功していると認められる。外部からの講師受入れによる授業も意欲向上につながっていると考える。 ○宮小の卒業生は向陵中で円山小の子どもたちと顔を合わせることで、事前に横のつながりをもつことは大切な活動だと感じた。			
【3】豊かな心の育成		B	◇複数で対応する児童理解やいじめ対応の継続 日常からの定期的な児童観察・児童理解。児童の困り感や課題についての共有。シャボテンログの活用 SCやSSW等、外部機関を含めた「いじめ会議」を毎月開催。相談支援パートナーの活用 ◇積極的な保護者対応（学校と家庭における指導の方向性の確認） 客観的事実を伝え、学校と家庭が協力しながら児童理解・方向性の確認・生徒指導していくことができる体制づくり。 ◇来年度は個人懇談を年2回、学級懇談を年3回へ ◇異学年交流（縦割り）活動の更なる充実 ◇自治的なあいさつ運動の継続化 委員会や学年の具体的な働きかけ	A	A
・子どもが互いを尊重し、支え合いながらよりよく生きようとする態度を育む。 ・学年学級での集団体験・集団活動の充実を図り、自律性（規範意識）社会性（相手意識）を育む。 ・道徳教育・社会性を育む体験的な活動を推進し、言語環境の充実を図る。 ・命と大切にしている指導の徹底、いじめの防止・早期発見・対処に努める。 ・新たな不登校を生まない未然防止の取組、組織的・計画的な不登校支援に努める。					

学校関係者 評価委員会 による意見	○子どもたちの挨拶はよい。 ○10月に中間懇談を入れることで、保護者とのコミュニケーションを図る手立てはよいと思う。 ○6年生と1年生の交流は両学年において成果が認められた。 ○青少年健全育成の観点からも良好な校内環境がうかがえる。 ○子どもたちは家庭から地域を歩き、学校に通う。地域との連携についてもう一步進めてもよいと感じた。
-------------------------	--

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
	【４】健やかな体の育成	A	◇体力向上加配教諭とのチームティーチング ◇休み時間における運動の場の設定 持続可能な取組、子どもたちが意欲的に取り組むことができる内容の提案、継続的な指導と児童の変容の確認。「宮小パーク」の効果的な活用 ◇もりもりタイムによる食育、健康教育の継続的な指導目的が明確で、子どもも教師も無理のない継続的な指導ができるように計画を見直し、次年度の実施方法に繋げる。 ◇運動機会の向上に向けた取組の計画 体育館・グラウンドの活用方法の見直し、担任の声掛けによる運動に取り組む意識の向上。	A	A
	・体育授業の充実による体力・運動能力の向上を図る。 ・運動遊びの奨励による、運動の日常化と運動への親しみを。 ・基本的な生活習慣、性に関する指導等、健康に関する指導の充実を図る。 ・健康で望ましい食習慣の啓発など食育の推進を図る。				
	学校関係者評価委員会による意見	○少数ではあるが、朝食を摂っていない子どもがいる。同じ子どもかもしれない。学校からのアプローチも場合によっては必要かもしれない。 ○食育による栄養への意識付けが良好であった。 ○工事箇所への安全配慮と運動機会の向上の両立を図ることができた。 ○小学校でしっかりと身体を作ることが寿命に影響すると思う。 ○小学校時の基礎体力は重要と感じる。遊びながら運動する機会を多くもてるような工夫をしてほしい。			
	【５】《学校職員としての資質の向上》	B	◇教師と子どもの適切な距離感 様々な場面を通じて子どもとの接し方、授業中の子どもたちとの関わりについて交流し、当たり前の日常実践になるよう努める。 ◇相手意識を高める継続的な指導 日常より子どもたちの様子を観察するとともに、情報共有しながら全学年・全学級で共通した指導を継続できるよう努める ◇必要感のある学び合いができる研修の計画と運営 短時間で、継続的に、気軽に困り感を解消できる（見通しがもてる）取組と雰囲気づくり。宮小ミニ研修の継続。 ◇働き方改革と教育の質の維持の両立を目指す取組	A	A
	・「授業実践と授業改善に務める教職員」「学校全体を見通した運営に努める学校職員」… 自己の職能向上に努める宮小の職員。 ・子ども理解を深める学年・学級経営の交流・研修の充実を図る。 ・自主的・主体的で専門性を磨く学年研修・校内研修の充実を図る。				
	学校関係者評価委員会による意見	○教員研修日を確保し、授業づくりのための時間を確保することは子どものためにもなる。 ○机の配置方法を学習意図によって変えるなど良い取組が全クラスで認められる。 ○引き続き、働き方改革と教育の質の維持の両立を図る取組を期待している。 ○どの職業でも世代を超えた勉強会は有意義だと思う。 ○教員同士のチームワークが大切と感じる。若い先生、ベテランの先生のよいところを互いに学ぶ機会が大切だと感じる。			